

# 磐姫皇后歌の〈何時辺乃方二〉

佐 佐 木 隆

一

『萬葉集』卷第二の巻頭近くに出ている、

1 秋田之穂上あきのたのほのうへに霧相朝きらふあき霞何時あがこひやまむ辺乃方二「我恋将息」(三・八〇)

という歌の第四句「何時辺乃方二」をどのように理解すべきか、さまざまな見解がある。本稿では、その問題について検討を加える。

周知のように、この歌は、

2 君之行気長成奴山多都祢迎加将行待尔可将待 (三・八五)

3 如此許恋乍不有者高山之磐根四卷手死奈麻死物呼 (三・八六)

4 在管裳君乎者将待打靡吾黒髪尔霜乃置万代日 (三・八七)

の三首のあとに置かれたものであり、1と4は「磐姫皇后、天皇を思ひて作りたまひし歌」という題詞を持つ連作を構

成している。

1の歌の〈何時辺乃方二〉には、不明な点が数多くある。この句はどのような語構成を持つものなのか、その語構成と表記との関係はどのようなものなのか。また、この句は、文字どおり「何時いっになつたら」という時間的な意味のものなのか、「どちらの方に」という空間的な意味のものなのか、それとも〈何時〉が時間を表し〈辺乃方〉が空間を表すということなのか。これらの疑問は、どれも密接に関連している。歌意についても、「秋の田の穂の上に霧らふ朝霞」という三句にわたる表現は、作者の心が恋の思いにとられていた状態を喩えたものなのか、その状態から作者が解放されることを喩えたものなのか、という疑問がある。右の疑問のうち話題になることが多いのは、〈何時辺乃方二〉は空間的な意味のものなのか、時間的な意味のもの

なのか、ということである。1の歌に類似する内容を持つ歌を見てみると、例えば、

5 ひさかたの天つみ空に照る月の将失日社吾恋止目

〔十二三〇四〕

という歌の「：照る月の失せなむ日こそ、吾が恋止まめ」は、恋情のおさまる「日」を問題にした表現である。一方また、

6 みさご居る沖つ荒磯に寄する浪往方毛不知吾恋久波

〔十二三七六〕

という歌の「ゆくへも知らず、吾が恋ふらくは」は、「何処ともなく寄せ何処ともなく去る波が恋の比喩」だという講談社文庫本（中西進）の説明のように、「吾が恋ふらく」を空間的に表現したものだと解される。上代語の「ゆくへ」には、「行く末」という時間的な意味で用いられた確実な例がなく、どれも空間的な意味のものだと解して何も問題は生じないからである。

これらの歌を見るかぎりでは、1の文脈では、第四句を「何時になったら」「どちらの方に」のいずれの意味に理解することも可能であるように思われる。

結局、当時は恋情がおさまるのを時間的に表現したのか、空間的に表現したのか、という一般的な一般論では、〈何時辺乃方二〉に対する種々の疑問を解消することができない。

## 二

〈何時辺乃方二〉について、注釈ではどのように説明しているか。賀茂真淵『萬葉考』では、これに「何時辺乃方二」と付訓し、「何れの方と云也、卷十九に、ほとぎす、伊頭敵能山乎、鳴か越らん、とも有もて、禮を邊に通はせいふをしる」と述べる。「いづべ」と「いづれ」は同義の語であり、両語の間には音韻的な相違があるにすぎないと見たわけだが、現在の研究水準では成立する余地のない見解である。

契沖『萬葉代匠記』では、この句を「イツ邊ノ方ニ」というかたちで掲げ、「霞ハカタヘニ晴行コトモアルヲ、イツカ我モソノコトク胸ノ晴テ戀ノ止ソトナリ」と説明する。また、同書には「邊ノ方トハ、渺々ト見エ渡ル田ノ其ノカタハラナリ」という説明も見えるから、〈何時辺〉の部分は「いづべ」あるいは「いつへ」という複合語を表記したものだとは解さず、〈何時辺乃方二〉は「何時（になつたら）、辺の方に」という意味のものだと解したことが分かる。この見解を採用するものに澤瀉久孝『萬葉集注釋』があり、それには、

「何時」は時である。「邊の方」は所である。「邊」は「奥見者 跡位浪立 邊見者 白浪散動」(三〇〇)の

「邊」である。奥(沖)と相對して用ゐられる場合が多いが、「風高邊者雖吹」(四・七八二)、「大海方往浪之」(十・二九〇)などの如く、「邊」とだけ用ゐられる場合もある。雲や霧を海にたとへる事は古今東西に例のある事であるが、その霧のさ中を「沖」と呼び、次第に薄れゆくはてを「へ」と呼ぶ事は十分考へられることである。

という補足的な説明が見える。ただし、澤瀉は「何時」と「辺の方」との関係について次のように付言し、自身が採用する見解にも問題があることを認めている。

たゞその二つに分けたところ、やゝ小さきみに過ぎ、特にこの一首のおほらかな聲調にふさはない難があるやうに見える。「いついづこへ」といふ風な意であればまだよい。「いつ」と云つて「邊の方」とことわつたところに難があるとも見られよう。

その後の注釈の説明はどうか。全集本では「いつになつたら」と口訳し、「イツへはイツに、くごころの意の接尾語へががついた形。カタは方向を表わす。いつどちらにという時間性と空間性が重ね合わされている」と述べる。「いつ」と「へ」とが「時間性」を表し、「方」が方向つまり「空間性」を表すという見解であり、「へ」に対する理解が契沖や澤瀉と異なる。新編全集本では、全集本と口訳は

まったく同じだが、句全体を時間的な意味のものと解して「へ」は頃の意。周辺の意から時間上に転用した。カタもここは時間的に用いている」と述べる。集成本と伊藤博『萬葉集釋注』にも、「いつになつたら」という目処をいう」とある。『萬葉集全注』(稲岡耕二)では、訓読文を「いづへの方に」とし、それを「何時どのように」と口訳したうえで、次のような説明を加える。

考の「何れの方」説により、何時をイツの借訓字とし、第二音節の清濁表記の違例とする方が歌としての難点は少ないように思われる。「何時邊」で「何時」という時間的な意味をも暗示した表記例と考えておきたい。口訳に「どのように」という様態を問う表現を用いる点は独特だが、その「どのように」という訳語を用いた根拠が不明である。和歌文学大系本(稲岡耕二)の口訳にも「何時どのように」とあるが、訓読文は「いつへの方に」となっており、また「イツへノカタと訓みどちらの方向に」と解する説もあるが、何時ごろとする説もある」という説明が添えてある。新古典大系本では、「一体何時になつたら」と口訳したうえで、「いつへのかた」の語は他に用例が見えない。「へ」も「かた」も時間の表現か。仏足石歌に過去を意味する「去にしかた」の語がある」と説明する。あえて「去にし方」の用例があると指摘するのは、句全体

は「時間の表現」だという理解に傾いていることを示す。以上の注釈のほかは、武田祐吉『萬葉集全註釋』や土屋文明『萬葉集私注』から古典大系本・講談社文庫本まで、『萬葉考』の「何れの方」と同様にこの句を空間的な意味のものだと解している。

諸注の説明を見渡すと、〈何時辺乃方二〉は時間にかかわる表現だと見る注釈は特に近時のものに多いことが分かる。それは、この句は時間的な意味のものだと主張する野中春水の論考の影響によるところが大きいと判断される。<sup>③</sup>

野中の論考では、まず「吾が恋やまむ」という表現は「つねに時を背景にしてある」と指摘する。次に、2と4の三首は「再び相逢ふことを期待してゐる心境」を反映しており、その三首をうけた第四首の1で、作者が相手に逢会するのを「いつ頃であらうかと反問し、歎息するのは當然の勢であらう」と述べる。また、時間をさす「何時」と場所・方向をさす「いづ」とは別語であり、表記面でもはっきり異なるから、両語はたがいに「一線を畫して」いると指摘する。そして、1の〈何時〉は文字どおり時間をさしたものだを見るべきであり、続く〈へ〉も「夕べ」「春べ」のそれと同様に時間を表し、〈方〉も「明け方」「暮れ方」のように「時の程度、時の限界を表すもの」だと見られる、という。さらにまた、空間的な「何処辺」〔五・三七〕があ

る以上は時間的な「何時辺」もありうるし、空間的な「於伎能可多」〔五・三三〕があるから時間的な「何時辺の方」もありうる、と論じる。その時間的な「何時辺の方」という表現については、「これは所謂、「かりほの庵」「真玉手の玉」といった疊語の様式であり、その結合は可能である」と説明する。

この野中の論に対する次のような批判が、澤瀉の注釈に見える。

その前半、即ち「何時」をイツと訓み、時間の意に解く説は、従来の説を明快に訂したものと思はれる。しかし後半、即ち「邊乃方」もまた時間と解する事はどうであらうか。「何処邊」があるから「何時邊」があつてもよく、「沖邊の方」があるから「何時邊の方」があつてもよいといふのは、推論としては認められるが存在の實証のないところにいささか疑問が残されてゐる。そこにあげられた例は皆場所のものであつて、時間のものではない。「春べ」「夕べ」はたしかにあるのだから、「いつべ」もあり得るといふところまでは推論として認められる。しかしその推定のうへに、更に「べの方」といふ推定の語を重ねるといふ點がどうであらうか。

この批判の要点は、「存在の實証のないところにいささ

か疑問が残されてゐる」という表現に端的に表れていると  
言える。

### 三

〈何時辺乃方ニ〉の〈何時辺〉は時間を表す複合語だと  
主張する野中の論考には、細部的には妥当な指摘も含まれ  
ている。しかし、その論考の帰結が妥当なものである蓋然  
性は、上代語の構文のありかたから見てきわめて低い。こ  
のことは比較的容易に確認できる。

まず、「吾が恋やまむ」という表現は「つねに時を背景  
にしてゐる」という指摘だが、これには問題がある。「吾  
が恋やまむ／吾が恋やまめ」という常套句はほかに九例あ  
るが、「時を背景にしてゐる」と言えるものは、既出の5  
の「照る月の失せなむ日こそ、吾が恋やまめ」と「しかま  
河絶えむ日にこそ、吾が恋やまめ」〔十五・三〇五〕の二例しか  
ないからである。ただし、空間的な意味の文脈で「吾が恋  
やまむ／吾が恋やまめ」と表現した例がないことは確かだ  
である。

次に、〈何時辺〉の語構成の問題である。野中は、もと  
もと「いにしへ」は「往にし辺」、「夕べ」は「夕の辺」で  
あり、「春べ」の「べ」もこれらの「辺」と同じく「時の  
性格」を持つ語だから、時間的な意味の「何時辺」もあり

うる、と論じる。右に引用したように、澤瀉はそれについ  
て「推論としては認められる」と述べているのだが、はた  
してどうか。

野中も澤瀉も気づいていないことだが、「いにしへ」「夕  
べ」「春べ」などの複合語が「時の性格」を持つのは、こ  
れらの末尾に位置する「辺」という後部要素の意味に由来  
するのではなく、先部要素である「いにし」「夕」「春」がま  
さしく「時の性格」を持つ語であることに由来する、とい  
うことである。つまり、「いにし」が過去の助動詞「き」  
の連体形を含む「去にし」であり、「夕」が一日のうちの  
特定の時間帯を表す語であり、また「春」が一年のうちの  
特定の時節を表すものだからこそ、複合語としての「いに  
しへ」「夕べ」「春べ」が結果的に「時の性格」を持つこと  
になるのである。

この三語の末尾に位置する「辺」は、いわゆる上代特殊  
仮名遣いの甲類の「へ」である。『時代別国語大辞典 上  
代編』の各項目の末尾には、立項された語が上代でどのよ  
うな複合語を構成しているか、そのパラエティがすべて  
列挙されている。それによれば、この「辺」を持つ複合語  
は四十六種あるが、その中には、これらの三語以外には  
「時の性格」を持つものがなく、ほかはみな「海辺」「皇  
辺」「寄る辺」などの空間的な意味を表す語である。一方、

乙類の「へ」を持つ複合語には、「…の上」に由来すると説明される「河の倍」〔記五〕や「峰の倍」〔干・四三〕などの「…のへ」の一群と、「等虚辞陪適」〔紀六〕や「和加久門尔」〔記三〕や「若可倍尔」〔六・三七〕などの「…へ」の一群とがある。両群合わせて十種だが、そのうち時間的な意味を表すのは「とこしへに」「わかくへに」「わかかへに」の三種である。これらの三種がそのような意味を表しうるのも、「とこ」(常)が「永遠／不変」などの時間的なニュアンスを持つ語であり、「わか(若)」が一生のうちの成年に達する以前の時期を表す語だからである。甲乙両類の「…へ」に、共通の特徴が認められるのである。

もともと方向を表す「方」が時間的な意味を表すに至った、上代の確実な例として知られているのは、既出の新古典大系本の説明にもあるように、仏足石歌に見える「去にし方」という複合語である。しかし、「いにしへ」の場合と同様に「去にし」の「し」は過去の助動詞「き」であり、だからこそ「去にし方」もまた時間的な意味を表しえたのである。野中が挙げた「明け方」「暮れ方」は中古から用例のある複合語だが、これらの「明く」「暮る」も一日の特定の時間帯に起こる現象を描写する動詞である。野中がそうであるように、「方」は単に「時の程度、時の限界を表すもの」だと理解するだけでは、これらの複合語にその

ような特別な事情があることを見落とす結果になる。空間的な意味と時間的な意味は、決して融通無碍なものではないのである【「方」の用法はあとで再び検討する】。

以上のような事実を確認すると、〈何時辺〉は時間的な意味の複合語を表記したものだとする野中の見解は、「何時」はまさしく時間にかかわる疑問詞だという点で、十分に成り立ちそうに思われる。しかし、この見解は構文面で大きい難点を含んでおり、結果的に成り立ちえないものである。そのことを確認するために、たがいに「一線を畫して」いると野中が指摘する「いつ」と「いづ」の二種の疑問詞について、その用法を具体的に見てみる。

とりあえず確認できるのは、時間をさす「いつへ」という複合語の例がほかにないのに対して、空間をさす「いづへ」という複合語が二例あるという事実である。

7 吾がここだ偲はく知らに霍公鳥伊頭敏能山乎鳴きか越  
ゆらむ 〔九・四一九〕

8 大海を候ふ水門事しあらは従何方君吾を率凌がむ 〔七・三三六〕

これらのうち、7の第四句「いづへの山を」は、いうまでもなく「どの辺りの山を」の意である。8の第四句〈何方君〉は一般に「何方ゆ君は」と訓じられ、それは「どちらの方へあなたは」の意だと解される。7に「…の山を

鳴きか越ゆらむ」とあり、8にも「…ゆ君は吾を率凌がむ」とあるから、文脈から見てこれらの「いづへ」は空間をさす語であることが分かる。

ほかの「いづ」の用例を見てみると、まず「吾が背子は何処行くらむ」〔四・五二〕や「伊豆久より来りしものそ」〔五・八三〕のように、空間的な意味を表す「いづく」という例がある。また、「何処へ、今夜誰とか」〔三三・三七〕のように、その「いづく」に「辺」が直接に付いた、やはり空間的な意味の「いづくへ」という複合語もある。さらに、「伊豆知向きてか」〔五・八七〕や「伊豆良と吾を問はば」〔五・三六九〕のように、方向をさす「いづち」や場所をさす「いづら」もあるほか、右の7と8に見るように「いづへ」の例もある。さらに、「伊豆礼をか、別きて偲はむ」〔六・四〇六〕のように、「いづ」が接尾辞の「れ」を持つ形態もある。「どこを通つてやつて来るのだろう」という意味に解されている「伊豆ゆかも…通はむ」〔四・三三九〕のように、「いづ」のまま場所を表した可能性のあるものが一例見えるが、これについて『時代別国語大辞典 上代編』には「イツクに対応する東国語形かともいわれるが、一例だけでは何ともいえない」とある。

このように、「いづ」という疑問詞は「いづく」「いづへ」「いづち」「いづち／＼」「いづち／＼」「いづれ」な

どのような空間的な意味の複合語を構成するのを基本とした、ということが確認できる。

一方、八十余の用例がある「いつ」は、確かにすべて「何時」の意で用いられている。また、「何時も何時も」という反復形式はあるが、複合語を構成したものは一例もない。「いつしか」「いつぞ」「いつとか」「いつの」「いつまで」「いつも」のように、「いつ」が伴うのは助詞に限られる。「いづ」とは性質が異なつて、「いつ」は複合語を構成しえない疑問詞であり、しかも、いかなる場合にも「何時」の意しか表さないのである。同じことは、上代だけでなく中古の「いつ」の用法にも認められる。

このように、時間的な意味を表す「いつ」は、八十余の用例がありながら一つとして複合語を構成していないのに対して、「いづ」は複合語を構成するのが基本であるだけでなく、実際に空間的な意味の「いづへ」が二例ある。この事實は、野中の言うような時間的な意味の「何時辺」が上代の複合語として存在しえなかつた蓋然性がきわめて高いことを示すし、同時にまた、問題の「何時辺」は空間的な意味の「いづへ」という複合語にあてられたものである蓋然性がきわめて高いことを示す。空間的な意味の「何処辺」があるから時間的な意味の「何時辺」もありうるだろうとか、空間的な「沖辺の方」があるから時間的な

「何時辺の方」もありうるはずだとかという野中の推論がいかに強引で無理なものであるか、ということがここで明確になる。「いつ」と「いづ」の用法はたがい「一線を畫して」いるのであれば、「いつ」は複合語を構成しなかったが、「いづ」は複合語を構成するのを基本としたという事実を、何よりもさきに指摘しなければならぬ。

それでは、〈何時辺乃方二〉を時間的な意味の「何時」と空間的な意味の「辺の方」とに分ける、契沖や澤瀉のような見解はどうか。これについては、野中が「歌の形からいつて、「いつ へのかた」と句割れになつた使ひ方が「いつ」を用ゐた用例から不自然である」と批判しているが、文意が不明瞭であるだけでなく、これはしかるべき調査に基づく発言なのかどうかということも不明である。あるいは、「いつ」が助詞を伴わない場合は、「何時来まさむと」(七三・三二八)や「何時かへり見む」(九・七三〇)のように「いつ」とそれをうける用言とが一句の中でじかに連接するのが通例だから、両者の間に「辺の方」のような語句が割り込みえたとは想定できない、という意味かとも思われる。文意をそのように理解して用例を調査してみると、助詞を伴わない「いつ」は七例あるが、確かに「いつ」と用言との間にそのような語句が挿入された例は見られない。しかも、「いつ十用言」という結合は、みな一句内に収ま

っている。この現象は「いつ」にだけ見られるものではなく、この種の疑問詞の用法に共通する現象のようである。

例えば、「なに」には『萬葉集』だけでも七十余の用例があり、これが助詞を伴わないものは二十一例含まれている。それらを見ると、「なにせむに／なにせむ」が十二例、「なにすとか」が八例、「なにすれそ」が一例で、二十一例のすべてにおいて動詞が直接に「なに」に続く形式になっている。この場合も、「なに十用言」は一句内に収まっている。「いつ」「なに」以外の疑問詞の用例は多くないが、ある限りの用例を見ても同じ現象のあることが確認できる。疑問詞とそれをうける用言との間に語句を挿入することは、上代語の構文として不可能だったのか、野中が「歌の形からいつて」と述べているように歌の表現ではそれが回避されたにすぎないのかは、手がかりがなくて不明である。どちらが真実であっても、「いつ（になつたら）、辺の方に」という理解が不自然で無理なものであることは明らかである。

また、〈何時辺乃方二〉を「何時」と「辺の方に」とに分けて理解しようとする、「何時辺の方に吾が恋息まむ」という第四句と第五句との承接関係に不自然な点が生じる。つまり、「何時」になつたら「吾が恋」は止むのだろうという疑問はよいとしても、その「吾が恋」はほかの空間で



はなく「辺の方」に止むだろうという想定・前提が作者の側になければ、「辺の方に吾が恋息まむ」と表現するのは唐突で不自然である。さきに引用した「雲や霧を海にたとへる事は古今東西に例のある事であるが、その霧のさ中を「沖」と呼び、次第に薄れはててゆくはてを「へ」と呼ぶ事は十分考へられることである」という澤瀉の説明は、その不自然さを解消しようとして持ち出したものだろう。しかし、「吾が恋」は「辺の方」に止むものだというような想定・前提が当時あったことは、ほかの諸歌の表現にも反映していない。1に対する澤瀉の口訳が、

秋の田の穂の上にかかつてある朝霧のやうな胸中、その霧はいつか、片方に晴れてゆくが、さ霧のまん中に閉ぢられたやうな我が戀心はいつやむ事であらうか。

という屈折したものになっているのは、それが歌の表現に対する不自然で無理な理解に基づく口訳だからではないのか。

問題点はまだある。さきにも引用したように、澤瀉は「辺」について「奥(沖)と相對して用ゐられる場合が多いが、「風高(カタクカク)邊者(ヘニハケドモ)雖吹(ヘニハケドモ)」「(四・七六)、「大海(オホウミ)方(ヘニハケドモ)往(ヘニハケドモ)浪(ヘニハケドモ)之(ヘニハケドモ)」(十・二五〇)などの如く、「邊」とだけ用ゐられる場合もある」と述べている。ここに挙げられているのは、

9 風高く辺には吹けども妹がため袖さへ濡れて苺れる玉

藻そ

10 春草の繁き吾が恋大い海の辺に行く浪の千重につもりぬ

の二首である。確かに歌の中には「辺」だけが詠み込まれており、「沖」と「辺」とが対比的に提示されてはいない。しかし、どちらの「辺」も海のそれをさしており、1の〈何時辺乃方二〉の「辺」とは用法が別である。9の場合、「玉藻」を「妹がため袖さへ濡れて苺」という作業は、「沖」ではなく「辺」で行ったわけだが、その際状況は、作者は「風高く辺には吹けども」と描写しているのだから、やはり作者には「沖」に対する「辺」という意識があったと見るのが自然だろう。また、10の「大い海の辺に行く浪の」という二句であえて「辺に行く」と表現したのは、「沖から辺に向かつて(浪が)寄せて行く」ということを言うためだから、こちらは「沖」に対する「辺」という作者の意識が一層はつきり出ていると言える。この「辺」も、〈何時辺乃方二〉の「辺」とは用法が異なる。

以上の諸点のほかに、澤瀉自身による「いつ」と云つて「邊の方」とことわつたところに難があるとも見られよう(既出)という指摘もあるから、ことさらに「何時(になつたら)、辺の方に」の意だと解すべき理由はない。

#### 四

「何時」と「辺の方」とを分割することが不自然であり、その「何時」が複合語を構成しえない疑問詞である以上は、少なくとも「何時辺」の部分は空間的な意味の「何辺」にあてられたものだとして理解しなければならない。

次に問題になるのは、それに続く「：乃方二」の部分だが、その「：の方に」の用法はどのようなものか。『萬葉集』の「方」の用例を見ると、「彼方」「都方人」などの複合語を含めて十八例ある。空間的な意味で用いるのを基本とし、時間的な意味で用いられた確例としては既出の「去にし方」が一つあるだけである。十八例のうち十例が、「：の方に」という表現を構成している。

11 父母は枕乃可多尔妻子どもは足乃方尔困み居て：〔五・八九三〕

12 霞立つ野上乃方尔行きしかば鶯鳴きつ春になるらし〔八・二四四三〕

13 吾のみや夜舟は漕ぐと思へれば伎敏能可多尔梶の音すなり〔五・三六四〕

14 さ夜更けて夜中乃方尔おほほしく呼びし舟人泊てにけむかも〔七・三三五〕

最初の11には「：は：の方に、：は：の方に、：」とあ

って、「枕の方」と「足の方」の二方向が対比的に詠み込まれている。12の「野の上の方に」という句は「行きしかば」にかかるから、この例の「方」も方向性を含む。13の「沖辺の方に」は、空間的な「沖辺の方」がある以上は時間的な「何時辺の方」もありうると言って野中が挙げた例だが、作者のいる海上の一点点から見ると「沖辺の方に」と表現したものだから、やはり方向性を含む。「：の方に」の「：の」という部分に、場所をさす語ではなく動詞が用いられた「左手の弓取る方の眉根掻きつれ」〔一・三五七〕という例も、方向を意識した「左手」「弓取る方」などの表現を含む。ほかの「方」の用例も、方向性を含む点は同じである。14の「夜中乃方尔」は野中が「方を時間的なものと考へ得る餘地もあり得る」と言って挙げた例だが、解釈に問題がある。文字どおり「夜中の方に」と解する説や、「方」を「瀉」の借訓字と見て「夜中の瀉に」と解する説や、「夜中」を地名と見る説その他があつて、時間的な「方」の確例とはならない。

空間的な「方」がみな方向性を含むことから見て、問題の「何時辺乃方二」の「：の方に」も「：の方向に」という意味・ニュアンスを含むものだと解さなければならぬ。「：の方に」という表現は、例えば「白雲のたなびく山之方西あるらし」〔四・五七四〕や12の「霞立つ野上乃方尔行きし

かば」などのように、ごく一般的な表現である。これらの例では、「山」「野の上」は場所をさし、「方」は方向をさすという形式になっており、11の「枕の方」と「足の方」も13の「沖辺の方に」も、その点ではまったく同じである。『古事記』『日本書紀』の両書に見える「吾家<sup>わがへ</sup>の方よ雲居立ち来も」(『記三、紀三』)でも、「吾家」は住居という場所あるいは住居のある場所をさし、「方」は方向をさす。

「：の方に」の用例のうち、13の「沖辺の方に」という例は特に重要である。なぜなら、この句と〈何時辺乃方二〉とは「：辺の方に」という同様の語構成を持つものだからである。両句では「沖」と〈何時〉とが対応しており、その「沖」は空間をさす語だという点に注目する必要がある。この点から見ても、また「：の方に」という結合を持つほかの例から見ても、〈何時辺〉は空間的な意味の「何辺<sup>いづへ</sup>」という複合語にあてられたものであり、それに続く「方」は方向をさすと解すべきである。

したがって、例えば山田孝雄『萬葉集講義』に見える、今の語にていへば「イツカタ」といふに同じ語をあらはせるなり。(中略)「イツヘノカタ」といふは重言なるに似たれども、今も「どちらの方」ともいふにおなじ語遣なれば、古とても不審なく用ゐしならむ。

という「いづへの方」に関する説明は不適切なものである。

この説明は、「辺」と「方」はどちらも空間をさす語だから「何辺の方に」は重複した表現だという判断に基づくものである。しかし、「：の方に」という形式の用例から明確なように、「何辺」は場所をさす複合語であり、「方」は方向をさす語だから、決して「重言」ではない。1や13の「：辺の方に」は一般的な表現だった、と見るべきである。既述のように、「何時辺の方」について野中が「これは所謂、「かりほの庵」「真玉手の玉」といつた疊語の様式であり、その結合は可能である」と述べているのは見当違いである。

空間的な意味の「いづへ」を〈何時辺〉と表記した例がほかにないから〈何時辺乃方二〉という句は時間的な意味のものとするべきだ、という意見がある。しかし、たびたび言うように、時間的な意味の「何時辺」という複合語は上代語の「いつ」の用法から見てありえなかつた蓋然性がきわめて高いから、その意見は成り立ちがたい。また、「何時辺の方に」を時間的な「何時」と空間的な「辺の方」とに分けて理解しようとするにも、さきに確認したようにいくつかの難点がある。〈何時〉の部分を経験的な意味のものだと解することは、どの点から見ても不可能なのである。結局は、『萬葉考』の「何れの方と云也」という説明が、意味的な面に関しては最も妥当性が大きいと

言える。

こうして、問題の〈何時辺〉は、その字面とは異なつてもともと空間的な意味の「いづへ」にあてられたものだと理解すべきことが明確になる。このことは、通常は「いづ」の表記に用いられる〈何時〉を、清濁の相違を無視して「いづ」の部分にあてたと理解すべきことを意味する。つまり、空間的な意味の「いづ」と時間的な意味の「いつ」とが類似の音韻を持つことを前提に、「いづ」の部分に〈何時〉をあてることによつて時間的な意味をそこに重ね合わせようとした、ということである。その点では、さきに引用した『萬葉集全注』の説明が結果的に妥当である。

このように、歌句に用いた語に、それと清濁が部分的に異なる借訓字をあて、その語義と借訓字の字義とを視覚面で重ねたと見られる類例としては、とりあえず、

15 朝影に我が身はなりぬ玉垣入風所見去にし子故に

〔十・三九四〕

という例の〈玉垣入〉たまかきぐるが挙げられる。これとまったく同じ歌が卷十二にも載録されており、どちらの歌にも「たまかぎる」という枕詞は用いられている。しかし、右の歌ではそれが〈玉垣入〉と表記され、卷十二の歌では〈玉蜻〉たまかきぐる〔十・三〇六〕と表記されている。この枕詞を〈玉限〉たまかきぐると表記したものがほかに三例あるように、その第四音節は濁音

である。右の歌の〈垣〉かきは第二音節が清音だから、この借訓字は清濁の異例である。借訓字を使用する際にも清濁の区別が保持されていることを根拠に、〈玉垣入〉のような表記の例がある以上はこの枕詞には「たまかきる」という形態があつた可能性も想定できる、という意見も出されている。しかし、実際にはそれとは逆で、ここは「神社の玉垣の間から入るほのかな風のイメージを文字によつて喚起するものとなつている」という『萬葉集全注』の理解が妥当だろう。そのような視覚的な目的のために、あえて清濁の相違を越えたと考えられる。

〈何時辺〉は空間的な意味の「いづへ」にあてられたものだとしたことになると、それは、「秋の田の穂の上に霧らふ朝霞」という比喻と「いづへの方に我が恋息まむ」という本旨との意味的な関係はどのようなものか、という問題と連動する。この点について考えておかなければならない。

比喻の部分は、「晴れぬ思いのうつとうしさを霞の晴れやらぬさまにたとえていう」(全集本)というように説明されるのが普通である。〈何時辺〉は文字どおり時間的な意味のものだとすれば、それは「…朝霞がいつか消えていくように」の意で用いられたものだと解するのが自然だし、〈何時辺〉は空間的な意味のものだとすれば、それは「…

朝霞がどちらかに消えていくように」の意だと解するのが自然である。いうまでもなく、後者のように理解すべきである。

1と同種の比喩を持ち、その比喩を、1と同様に「疑問詞——む」を含む本旨の表現がうける構成になっているものには、例えば、

16 天飛ぶや軽の社の斎ひ楓幾世まであらむ 隠り孀そも

〔十・三六五〕

17 さを鹿の入野のすすき初尾花何時しか妹が手を枕かむ

〔十・三七七〕

というような歌がある。16の「天飛ぶや軽の社の斎ひ楓」という比喩は、「それにいつまでも人が触れずにいるように」といった意味で本旨の「幾世まであらむ」を導入し、17の「さを鹿の入野のすすき初尾花」という比喩は、「それを早くと待つように」といった意味で本旨の「何時しか妹が手を枕かむ」を導入する。これらの「幾世」「何時しか」は時間的な意味を表す疑問詞を含むから、結果的に比喩の部分も時間的なニュアンスを持つものになっている。

「疑問詞——む」を含まない例にも、

18 我が心清隅の池の池の底吾は忘れただに相ふまでに

〔十・三六六〕

19 真野の浦の淀の継ぎ橋心ゆも思へや妹が夢にし見ゆる

〔四・四〇〕

などの歌がある。18の「我が心清隅の池の池の底」は「そのように心に深く」というニュアンスで以下の「忘れじ」を導入し、19の「真野の浦の淀の継ぎ橋」は「そのように次々に絶えず」というニュアンスで以下の「思へや」の表現を導入する。

右の諸歌の表現を見ると、当然のことではあるが、歌の前半部にある比喩がどのようなニュアンスで後半部の本旨を導入するかは、その本旨の表現内容によって決定されるということが分かる。1の場合も同様で、「秋の田の穂の上に霧らふ朝霞」という比喩のニュアンスは、「いづへの方に我が恋息まむ」という本旨の、特に「息まむ」の部分に対応するものでなければならぬ。したがって、この比喩は、作者の心が恋の思いにとらわれている状態を表すのではなく、その状態から作者が解放されることを想定したものであり、「…朝霞はどちらかへ消えてしまふが」というニュアンスを持つものだと解すべきである。

## 五

1〜4の四首の連作が成立した時期・過程について諸説があることは、周知の通りである。この連作が漢詩の絶句の起承転結を意識して構成されたと解しうるような、内容

的に一貫した配列を持つことが指摘される一方で、四首の間の表現性にそれなりの相違が認められるという指摘もある。しかし、表記論の立場から見ると、四首はきわめて等質的である。四首の表記をもう一度見てみる。

2 君之行気長成奴山多都弥迎加将行待尔可将待

3 如此許恋乍不有者高山之磐根四卷手死奈麻死物呼

4 在管裳君乎者将待打靡吾黑髮尔霜乃置万代日

1 秋田之穗上尔霧相朝霞何時辺乃方二我恋将息

字数の面では、1と2と4は二十字で構成され、3は十二字で構成されている。三首の字数が一致し、残る一首も二字多いにすぎない。これは表記に認められる一つの等質性である。訓字・音字の用法を見ても、2のそれがやや単純なものになっているだけで、四首の間にこれといった落差はない。

次に、細かく用字をしてみる。2の第四句と第五句には助詞「か」が二つ用いられており、それらには〈加〉と〈可〉の別字があてられている。これは、4の第四句と第五句および、1の第二句と第四句に用いられた助詞「に」が、〈尔〉〈日〉および〈尔〉〈二〉によつて表記されているのと同工である。1の第一句に用いられた〈之〉と第四句に用いられた〈乃〉も、同種の文字遣いに属する。また、2の〈将行〉〈将待〉、3の〈不有〉、4の歌の〈将待〉、1

の〈将息〉はどれも漢文式の返読表記である。これらの点から見ても、やはり四首の表記・用字は等質的である。あえて極端な言いかたをすれば、四首の表記・用字の様態は、同時期に同一人物によつて右のようなかたちに文字化されたのだろうとさえ推測できるようなものになっている。

2と4の三首の表記を、別の角度から見ている。2の表記は一般的なものの特に注意すべき点はないが、3と4の二首の表記には視覚面での工夫が加えられている。3の第五句の〈死奈麻死物呼〉では、助動詞「まし」のシに〈死〉をあてており、それは、すでに指摘があるように「死なましものを」という表現の意味との対応を意識したものである。また、4の第五句の〈霜乃置万代日〉では、複合助詞の「までに」を〈万代日〉と表記している。この〈万代日〉が視覚を通じて表す意味は「…待たむ……までに」という歌意に対応するものである。そのこともすでに指摘されている。ただし、「霜の置くまでに」は、「吾が黒髪」に白髪が交じることの比喩なのか、実際にそれに「霜」が降りるという意味なのか、諸注の判断は必ずしも一致していない。〈万代日〉という表記は、何時間といった程度ではなく、何日も待ち続けて白髪が交じるといった脈でこそ意味を持つものだから、「までに」を〈万代日〉というかたちに文字化した人物は句意をそのように理解し

ていたはずである。

ところで、3の〈死奈麻死・物呼〉と4の〈霜乃置万代・日〉に用いられた〈死〉〈万代日〉が、表音のための用字でありつつ、一方でその字義をも積極的に利用したものであることは、1の〈何時辺乃方二〉という表記を理解するのに好都合だと言える。というのは、第二首の〈死奈麻死・物呼〉と第三首の〈霜乃置万代・日〉は、続く第四首の1も同様の用字を含むものである可能性を、視覚を通じて四首の歌を享受する人物に想定させうるものだからである。それだけでなく、1の〈何時辺乃方二〉は特異な表記だが、空間的な意味の「いづへ」が清濁の相違を越えて〈何時辺〉と表記されたのではないかという、その人物が歌を見て直ちに抱く見込みの正しさを支持し保証するものにもなっている。つまり、〈何時辺乃方二〉の直前に〈死奈麻死・物呼〉と〈霜乃置万代日〉があることは、〈何時辺乃方二〉もまた表音と表意をかねた部分を含む表記だということを、その人物にさとらせることになるのである。

現在見られるようなかたちに四首を文字化した人物がそのような関係を明確に認識していたとすれば、それらは三首の表記の關係に配慮した意図的な用字であり、歌の配列もまた三首の表記を意識したうえでのものだということになる。そうだと断定できる確実な根拠はないが、その可能

性を想定させる材料ならばないわけではない。

第二首の〈死奈麻死・物呼〉に類似する表記には、〈所煞鴨將死〉(一・三三六)や〈消鴨死益〉(一・三三五)や〈落日莫死〉(一・三三七)その他の例がある。「死にかもしなむ」「落つるもかもしなまし」の「し」はサ変動詞の連用形であり、「落つる日無し」の「し」は形容詞の語尾である。どの〈死〉字も直接的には表音のために用いたものだが、一方では字義をも積極的に利用している。第二首の〈死奈麻死・物呼〉の二つめの〈死〉字もそうした用字の一例であり、決して孤例ではない。第三首の〈霜乃置万代日〉の〈万代〉にも、〈伊隠万代〉(二・二七)や〈羅生万代尔〉(三・三三六)その他の類例があり、やはり孤例ではない。これに対して、第四首の〈何時辺〉は借訓に用いられた唯一の例であり、しかもそれは清濁の相違を越えた例外的な表記である。したがって、孤例で特異な〈何時辺〉は、視覚を通じて第四首を理解する人物に、たとえ一瞬ではあっても、とまどいを覚えさせ違和感を与えたはずである。しかし、〈死奈麻死・物呼〉と〈霜乃置万代日〉を含む二首を直前に置いておけば、〈何時辺乃方二〉という句もそれらと同種の趣向を加えた表記なのだという理解に、その人物がたどり着くように誘導することができる。このように見れば、〈何時辺乃方二〉の表記はほかの二つの句の表記に支えられること

よって結果的に正しく理解されるのだということを、この歌群を現在見られるようなかたちに文字化した人物は意識して歌を配列した、と想定することが可能となる。

34と1との間に見られるこうした表記上の関係にきわめて近いものが、藤原麻呂から三首の歌を贈られた大伴郎女の「和ふる歌四首」〔四・五五〇五五六〕の表記にも認められる。どちらも高度な技法である。1〜4が連作として構成され、現在見るようなかたちに文字化された時期は、郎女の歌が詠まれた時期（養老年間）に近いとも考えられる。それでは新しすぎるといふ批判も出るだろうが、連作が成立した時期はその頃だと見る歴史家の説も実際にあり、それなりに成り立つ想定だと思われる。

## 注

(1) 本稿では、例えば〈何時〉のようにへんを用いる場合はその表記・用字のありかたを問題とし、一般的に「何時」とする場合は語・形態素を問題とする、というように書き分ける。

(2) 『萬葉集』には、「ゆくへ」という複合語が十六例ある。それらの用法を詳細に検討すると、「行く末」という時間的な意味で用いられたと解さなければならぬ例は一つもなく、どれも「行くべき場所／進むべき方向」という空間的な意味あるいは、「ゆくへ無し」「ゆくへ知

らず」を「どうしたらよいか分からない」という困惑を表すのに用いたと解しうる例ばかりである。そのことについては、小論「上代語の「ゆくへ」——用法と語義——」〔『学習院大学文学部研究年報』48輯（二〇〇二年三月）〕で私見を述べた。

(3) 野中春水「何時邊乃方」考〔『萬葉』第八號、昭和二十八年七月〕。

(4) 〈従何方君〉は、「何方ゆか君」とも訓じうる。これについては、小著『上代語の構文と表記』（一九九六年）の第I部第四章第3節で私見を述べた。

(5) 野中の挙げている「かりほの庵」「真玉手の玉」のうち、前者はともかく後者の引用のしかたは不適切である。「真玉手乃玉手指更」〔六・五〇三〕の例を見ても明瞭なように、「真玉手」を言い換えたのが「玉手」だから、「玉の玉」のところで引用を止めるのは不適切である。

(6) この〈所煞鴨將死〉を、「死にかも為なむ」の意ではなく、「死ぬ」を重ねた「死にかも死なむ」の意だと解する注釈もある。しかし、これと同様の構文に属する〈消鴨死益〉や〈不相鴨將有〉〔七・三三三〕や〈開哉散〉〔七・三三三〕などの表現を見れば明確になるように、どれも活用語が「連用形+かも+連体形」という形式で結合したものであり、反復された同一の語の間に「かも」が挿入されたものではない。私見によれば、「死にかも為なむ」という表現は、〈恐尔毛曾人者死為〉〔四・五九六〕や〈海哉死為流山哉死為流〉〔七・三三三〕などに見られる



「死に為<sup>ず</sup>」という結合に「かも」が挿入された形式のものであり、また「為<sup>し</sup>なむ」は〈乱裁<sup>みだれや</sup>為<sup>し</sup>なむ〉(十一・三七九)のそれと同じものである。

(7) そのことについては、小著『萬葉集構文論』(二〇〇一年)の第II部付章で私見を述べた。

付記—本稿は、平成十四年五月十九日に日本大学文理学部で開催された「上代文学会五十周年記念大会」で口頭発表した内容に、若干の修正を加えてまとめたものである。質疑応答の際に多くの示唆を賜った方々に御礼を申し上げます。